

須江関ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ

昭和63年度

平成元年3月

河南町教育委員会

す　え　せき　の　いり

須江関ノ入遺跡

序

景観の勝れた県立公園旭山をはじめ、西部と北部は比較的なだらかな山並が連なり、東は、最高所60米程の須江丘陵が横たわる。そして、中心部は、かつての広瀬沼が広大な沃野となり南に開ける。このような自然の豊さは、私達町民の誇りである。

須江丘陵は、かつてその東側を北上川が、西側を玉造川（現江合川）が川筋を変えながら流れ、ここに住み着いた人々に、時代を超えて、豊かな生活の糧を与えてきたところである。

縄文時代の狩猟採集の場になり、米作りが始まってからの弥生から現代に至るまでの人々の生き様が土地に刻みつけられ、あるいは記録として、私達に伝えられている。

この須江丘陵は、石巻近郊に当たるところから、民間の開発によるスプロール化が年々激しくなってきている。開発から自然や遺跡を護り、調和のとれた生活環境を整備することは、現代の私達に与えられた責務である。とりわけ、遺跡について、その範囲と性格を把握し、その保存を図る必要がある。

そこで、昭和62年度と昭和63年度の2カ年にわたり、国庫補助金の交付を得て、遺跡の詳細分布調査を実施することになった。

広大な面積の詳細分布調査ではあったが、調査を可能ならしめたのは、宮城県教育庁文化財保護課ほか関係諸機関並びに地元の方々の並々ならぬ御協力の賜物であった。埋蔵文化財の保存と開発関係との調整は、今後も重要な課題であるが、今回の詳細分布調査をとおして学ぶべき点が沢山あった。

調査に御協力いただいた方々に深甚の謝意を表すとともに、この報告書が社会教育の資料として活用されることを心から願うものである。

平成元年3月

河南町教育委員会

教育長 浅野 鐘雄

目 次

序

I 調査に至る経過	2
II 遺跡の位置と環境	4
III 調査の方法と経過	8
IV 基本層位	9
1. B区…9 2. C区…9 3. D区…10	
V 発見された遺構と遺物	11
1. B区…11 2. C区…12 3. D区…12	
VI まとめ	16
[引用・参考文献]	

■図版目次

第1図 周辺の遺跡	3	第7図 D区検出遺構	13
第2図 調査範囲	6	第8図 C区・D区出土遺物(土器)	14
第3図 D区基本層位断面図	10	第9図 C区・D区出土遺物(石器)	15
第4図 D区N C・N D-536地点 層位断面図	10	第10図 B区遺構配置図	26
第5図 B区検出遺構	11	第11図 C区(北区)遺構配置図	28
第6図 D区古線拓影	12	第12図 C区(南区)トレンチ図	29
		第13図 D区遺構配置図	30

■写真目次

①B区調査前全景	20	⑦B区7号焼土遺構検出状況	21
②C区調査前全景	20	⑧D区2号焼土遺構検出状況	22
③D区3号窯跡・灰原確認面	20	⑨D区3号焼土遺構検出状況	22
④B区1号住居跡確認面	21	⑩D区6号焼土遺構検出状況	22
⑤B区SK-1検出状況	21	⑪C区・D区出土遺物(土器)	23
⑥B区6号焼土遺構検出状況	21	⑫C区・D区出土遺物(石器)	24

例　　言

1. 本書は、昭和63年度国庫補助事業として実施した閑ノ入地区的詳細分布調査の内容を収録した報告書である。
2. 本事業は河南町教育委員会が担当し、宮城県教育庁文化財保護課の協力を仰いだ。
3. 土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原：1987)を利用した。
4. 本書を作成するに当たり、整理・執筆・編集は、主事中野裕平が担当した。
5. 報告書の作成において、下記の方々・機関から助言・協力を賜った。
宮城県教育庁文化財保護課、平沢英二郎（広瀬小学校教頭）、三宅宗議（石巻高等学校教諭）、高倉敏明（多賀城市埋蔵文化財調査センター）、渡辺泰伸（仙台育英学園高等学校教諭）、佐藤敏幸（瀬峰町教育委員会）

6. 遺構略号は下記のとおりである。

S I—豊穴住居跡・豊穴状遺構 SK—土壤

7. 調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は、河南町教育委員会が保管している。

調　　査　要　項

遺　跡　の　名　称：閑ノ入遺跡

遺　跡　所　在　地：宮城県桃生郡河南町須江字閑ノ入・茄子川ほか

調　　査　主　体：河南町教育委員会

調　　査　員：河南町教育委員会社会教育課 主事 中野裕平

調　　査　指　導：宮城県教育庁文化財保護課 技術主査 手塚均、技術主査 佐藤則之、技師 赤沢靖章、技師 加藤明弘、技師 菅原弘樹、技師 近藤和夫

調査・整理協力：宮城県教育庁文化財保護課

(調査参加者) 伊藤ゆう子、亀山信子、今野はな子、佐藤公雄、佐藤定、佐藤次雄、高橋吉雄、橋浦たき子、橋浦千代枝、橋浦安雄(以上整理も含む)

調　　査　事　務　局：河南町教育委員会社会教育課

調　　査　期　間：昭和63年5月10日～昭和63年12月10日

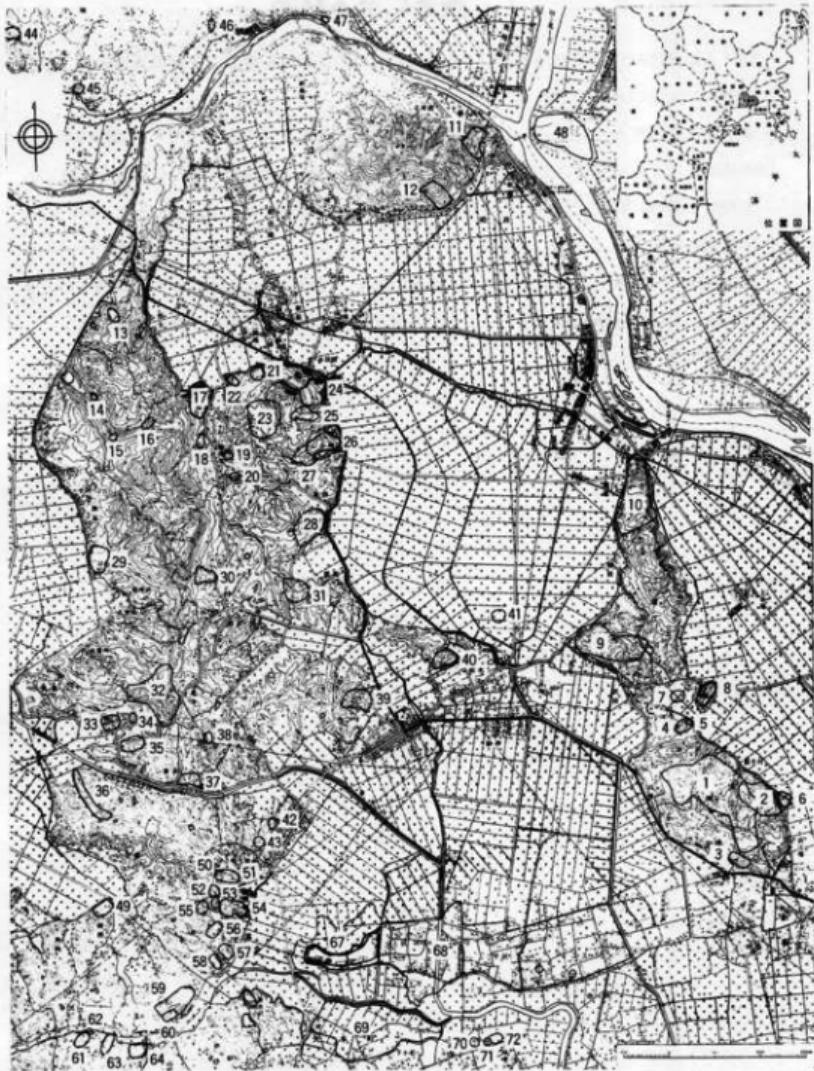
調査対象面積：58,298m² (発掘面積 35,049m²)

I. 調査に至る経過

関ノ入地区詳細分布調査の事業着手の経過については、昨年度の文化財調査報告書（中野：1988）に記述のとおりである。

本年度は昨年度からの関ノ入地区詳細分布調査の第二年次目の事業に当り、昭和63年4月、国庫補助金の交付申請及び発掘調査の通知の手続きを行い、昭和63年5月に調査を開始した。

当初は年度内にD区、C区、B区とA区の北西部部分の調査を行う予定であった。しかるに、C区調査の段階で、より多くの遺構の広がりが予想されたため、一部を除き、調査区内の表土を全面除去し、遺構の確認に努めた。調査の結果、遺構は予想を下回ることが判った。遺構の広がりと遺構分布の密度のおおよそが把握されたので、12月中旬に野外調査を終了し、室内整理作業に入った。



第1図 周辺の遺跡

II. 遺跡の位置と環境

遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代		
河 南 町							
1	関ノ入遺跡	縄文・古墳・平安	40	柏木遺跡	近世		
2	長者船跡(長者平遺跡)	中世	41	玄海田遺跡	—		
3	御所敷跡	中世	42	新田A遺跡	古代		
4	代官山遺跡	奈良・平安	43	新田B遺跡	古代		
5	代官山櫛六古墳群	古墳・古代	石 卷 市				
6	港浜園遺跡	—	6	鶴山遺跡	古代		
7	星野田船跡(星野田城)	中世	鳥 谷 町				
9	原江工山遺跡A	平安	44	中野遺跡	古墳(後)・奈良・平安		
10	浜江櫛塚遺跡	縄文(中)・古墳(後)・奈良・平安・中世	45	貝塚貝塚	縄文(崩・中)		
11	菅原船跡(船山城)	中世	46	笠石貝塚	古墳(前)・中		
12	武田船跡(武田尾敷)	中世・近世	47	御藏貝塚	縄文(前)		
13	高森山遺跡	古墳・奈良・平安	桃 生 町				
14	大沢A遺跡	縄文・奈良・平安	48	神取山遺跡(神取山城)	中世		
15	大沢C遺跡	奈良・平安	矢 本 町				
16	大沢B遺跡	縄文	49	野田貝塚	縄文(前)		
17	小沢遺跡	奈良・平安	50	平田貝塚	縄文(崩・後)		
18	南清水寺跡遺跡	縄文	51	加武塞遺跡	中世?		
19	南清水A遺跡	縄文(後)	52	国見台遺跡	奈良・平安		
20	南清水B遺跡	縄文・奈良・平安	53	国見沢遺跡	奈良・平安		
21	黒沢A遺跡	縄文・奈良・平安	54	御峰遺跡	奈良・平安		
22	黒沢B遺跡	縄文・古代	55	国見沢A遺跡	古代		
23	宇一東遺跡	縄文(中-後)	56	国見沢B遺跡	古代		
24	箭山遺跡	縄文・奈良・平安	57	浜江場遺跡	縄文・奈良・平安・中世		
25	大沢沢遺跡	縄文・奈良・平安	58	五合遺跡	縄文(早・盛)		
26	小崎遺跡	近世	59	越ノ口遺跡	中世		
27	小崎遺跡	縄文・奈良・平安	60	一村清水遺跡	奈良・平安		
28	茅田越跡	—	61	長森寺跡	中世・近世		
29	朝日貝塚	縄文(中)	62	中沢上遺跡	古代		
30	喜多村蛇跡(高地谷城)	中世	63	柳沢跡	中世		
31	佐庭船跡	縄文(中-後)・奈良・平安	64	鈴ヶ原船跡	中世		
32	浜江船跡(駆立部)	中世	65	清水沢遺跡	古墳(後)・奈良・平安		
33	桑村貝塚	縄文(前)	66	国見沢日遺跡	古代		
34	桑村遺跡	奈良・平安	67	宮野井遺跡	古墳(後)		
35	青木起跡(林光院)	中世	68	御井遺跡	弥生・奈良・平安		
36	矢面遺跡	古墳・古代	69	小松遺跡	縄文・弥生・古代		
37	南浦經跡	—	70	二ノ原	中世		
38	佐良山遺跡	古代・江戸	71	五十鈴神社古墳	古墳		
39	南田經跡	近世	72	小畠遺跡	古墳(後)・奈良・平安		

関ノ入地区は、宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入及び茄子川地内に所在し、JR石巻線佳景山駅の南方約3.5 kmにある。遺跡の所在する河南町は宮城県の東部に位置し、石巻市の北西に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川と合流して石巻湾に注いでおり、その南側の平坦地となだらかな丘陵地が町域を形成している。

東に標高60~65mの通称須江丘陵、西に麓岳丘陵から続く標高70~170 mの通称旭山丘陵、北に最高所173 mの和渕山と共に連なる丘陵を配している。町の中央部には低坦地があり、

江戸時代には用水確保のため広瀬沼が造られたが、大正10年から昭和3年にかけて干拓され水田地帯となっている。

須江丘陵は、小竹地区を挟んで大きく南北に二分される。調査対象区域は、丘陵南部のほぼ中央の頂部及び斜面に立地しており、頂部の標高は60～65mである。現況の大部分は杉や雑木の山林で、他に僅かの畠地がある。

本遺跡の周囲にも多数の遺跡が発見されている。須江丘陵の北端にある須江糠塚遺跡は、縄文時代中期から古墳時代前期、奈良・平安時代、中世に至る複合遺跡であり（高橋守克、阿部恵：1987）、須江瓦山窯跡Aには大規模な窯跡群がある。また、代官山や茄子川には横穴^(註1)の存在が確認されている。

さらに周辺部に目を移すと次のようになる。

町内には旧石器時代の遺跡の発見は知られていない。

縄文時代の遺跡としては、縄文後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学史的にも著名な宝ヶ峯遺跡がある（伊東信雄：1957、松本彦七郎：1919-a、1919-b）。他に朝日貝塚、桑柄貝塚、小崎遺跡、俵庭遺跡などがあり、これらは旭山丘陵とその麓部で平坦地と接する縁辺にある。

弥生時代の遺跡としては本鹿又遺跡、古墳時代の遺跡としては須江糠塚遺跡、高森山遺跡^(註2)がある。また、新田A遺跡では古式土師器を出土している。

奈良・平安時代の遺跡としては前述の須江糠塚遺跡、須江瓦山窯跡Aのほか、代官山遺跡、高森山遺跡、俵庭遺跡などがある。

中世以降には、旭山や須江の丘陵上などに多くの城館が築造され（館数14）、本遺跡の周辺では金壳吉次の仮屋敷跡（藩政期には小島嘉右エ門の除屋敷跡と言われる）とされる長者館跡があり、須藤勘解由左衛門が館主とされる糠塚館跡（須江糠塚遺跡）や塩野田城（館）跡がある。

註 (1) 石巻高等学校教諭三宅宗議氏の御教示による。

(2) 広瀬小学校教頭平沢英二郎氏の御教示による。なお、遺物は町教委が保管している。



第2図 調査範囲

III. 調査の方法と経過

今回の詳細分布調査は、閑ノ入地区開発区域内に、『宮城県遺跡地図』登載の周知の遺跡である閑ノ入遺跡が所在するため、遺跡の立地している丘陵頂部及び斜面を対象に行ったものである。

地区設定：新しい区名を設けず、昨年度調査を行ったC区・D区の拡張という扱いのもとで、C区の北側及び南側をC区、D区の西側をD区の区域内に入れ、それぞれをC区、D区と名付けた。また、A区とD区の間をB区と名付けた。国家座標X=+36.0、Y=-170.0を原点とし、調査区域全体に30mごとの基準杭と3m単位のグリッドを設定した。グリッド表記は、東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で表わし、両者を組み合わせて呼ぶことにした。したがって、基準杭Aの南東グリッドの名称は0A-500である。

調査方法：事前の踏査により、D区N P-544で遺構の一部が確認され、D区N Q-544、N I-L-528~30、N R-486地点で遺物が表面採取された。これらの地点を中心に関連遺構の有無を明らかにし、遺跡の範囲、性格を明らかにすることを目的として調査を行った。調査範囲が広範に亘り、且つ現況が杉、雜木の山林である所が多いため、効率的に調査を進める上で、表土除去には重機を用いた。

調査の経過：詳細分布調査は、昭和63年5月10日から開始した。D区、C区、B区の順で行った。

①B区（対象面積：18,918m² 発掘面積：13,426m²）

調査区の現況を見た上で、削平を受けているであろう水田・採草地については、トレーナー法によって表土を除去し、他は全面の表土を除去したのち、調査グリッドを設定するための杭打ちを行い、調査を開始した。頂部からは土壙（第1～第5号）、焼土遺構（第2・第9号）、東側斜面からは焼土遺構（第5～第7号）、南側斜面からは住居跡（第1～第3号）、焼土遺構（第1・第3・第4・第8号）が発見された。

②C区（対象面積：11,841m² 発掘面積：7,662m²）

ここでは昨年度の調査区の南北を拡張したので2地点に分けられる。調査は南側から開始した。調査グリッド設定のための杭打ちを行った後、トレーナー法によって表土を除去した。土師器・須恵器の破片の散布はみられたものの、遺構は発見されなかった。次に北側に調査グリッド設定のための杭打ちを行い、トレーナー法によって表土を除去した。この時点で住居跡（第3・第4号）、土壙（第43～第54号）、焼土遺構（第2～第4号）を発見した。この段階でより多くの遺構の広がりが予想されたため、遺構の確認されている斜面の全面の表土除去を行い、その結果、住居跡（第5～第9号）、土壙（第55～第57号）、焼土遺構（第5号～第12号）

を発見した。

③D区(対象面積: 27,539m² 発掘面積: 13,961m²)

調査グリッドを設定するための杭打ちを行ったのち、調査区の南側からトレンチ法で表土除去を行った。この時点で住居跡(第1・第2号)、窓跡(第1~第5号)、焼土遺構(第2~第11号)が発見された。このあとC区と同様の理由により、遺構の確認されている斜面のはば全面の表土除去を行い、その結果、住居跡(第3・第4号)、窓跡(第6・第7号)、焼土遺構(第12~第21号)、合口甕棺1基、溝1条を発見した。

工 程 表

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
器材運搬	↔									
地区設定	DK				CK		BK			
表土拂土		DK				CK	DK	BK		
遺構検出			DK							
測量・写真			DK			CK	DK	BK		
遺物整理								↔		
図面 写真整理								↔		
報告書の作成									↔	

IV. 基 本 層 位

1. B区

10Y R4/4褐色のシルトの単層で、調査区全体に分布する。厚さは5~15cmで、C区・D区にみられる褐色土よりも多少ぼさばさしている。また、家屋の東西はいずれも削平を受けているが、西側にある水田の南の一画10mほどは盛土となっており、最も厚い所で253cm盛られていた。

2. C区

南側の調査区は10Y R4/4褐色のシルトの単層で、調査区全体に分布する。厚さは10~50cmで、5~50mmの礫を含む。B区・D区にみられる褐色土よりも多少ぼそぼそしている。東側では10Y R3/4暗褐色のシルトを斑状に含むところがある。

南側の調査区は10Y R5/4に近い黄褐色のシルトの単層で、調査区全体に分布する。厚さ10~35cmで、色調は多少異なるものの、B区の褐色土に似ている。

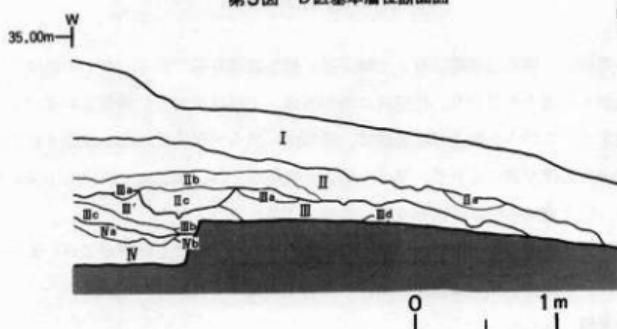
3. D区

調査区が広範囲に亘るため部分的に異なっているが、基本的には2層に分けられる。

[第Ⅰ層] 10Y R 4/4褐色のシルトである。調査区全体に分布する層で、厚さ20~30cmで、5~30mmの礫を含む。520ライン以南では10Y R 3/3暗褐色のシルト、10Y R 5/6黄褐色のシルトを斑状に含んでいる。

[第Ⅱ層] 10Y R 5/4に近い黄褐色のシルトである。調査区の南側（524ライン以南）に分布する層で、厚さ5~30cmである。石器は全て本層上面から出土している。また、本層下部には5~50mmの礫を多く含んでいる。

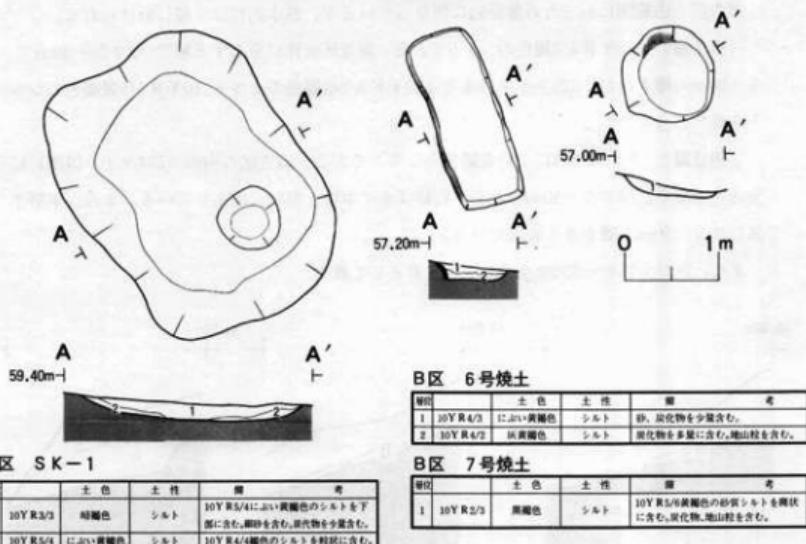
また、ND・NE-536地点の土層も参考として載せた。



層位	土色	土性	構造	名
I 10Y R 5/4	に近い黄褐色	粘土質シルト	細粒を含む。	
II a 10Y R 5/6	黄褐色	シルト質粘土		
II b 7.5Y R 5/6	明赤褐色	シルト質粘土	10Y R 5/4に近い黄褐色の粘土質シルトを複数に含む。2.5Y 7/2暗黄色の粘土粒を斑状に含む。	
II c 7.5Y R 5/6	明赤褐色	シルト質粘土	2.5Y 7/2暗黄色の粘土粒。2.5Y R 5/6明赤褐色のシルト質粘土を複数に含む。	
II d 7.5Y R 5/6	明赤褐色	シルト質粘土	2.5Y 7/2暗黄色の粘土粒。2.5Y R 5/6明赤褐色のシルト質粘土を複数に含む。下部にマンガン鉱を含む。	
II e 7.5Y R 5/6	明赤褐色	シルト質粘土	2.5Y R 6/6暗褐色のシルト質粘土を含む。	
III 5 Y R 5/8	明赤褐色	シルト質粘土	2.5Y R 5/6明赤褐色のシルト質粘土を複数に含む。	
III' 5 Y R 5/8	明赤褐色	シルト質粘土	2.5Y R 6/6暗褐色のシルト質粘土。2.5Y 7/2暗黄色の粘土又は粗粒を複数に含む。下部にマンガン鉱が沈着している。	
III b 2.5Y 7/2	灰黄色	シルト質粘土	2.5Y R 5/6明赤褐色のシルト質粘土を含む。	
III c 5 Y R 5/8	明赤褐色	シルト質粘土	2.5Y 7/2暗黄色のシルト質粘土を複数に含む。マンガン鉱が下部に沈着している。	
III d 7.5Y R 5/6	明赤褐色	粘土	2.5Y 7/2暗黄色のシルト質粘土を複数に含む。	
IV a 7.5Y R 5/6	明赤褐色	シルト質粘土	2.5Y 7/2暗黄色のシルト質粘土との複合層。	
IV b 2.5 7/2	灰黄色	シルト質粘土	2.5Y R 5/6明赤褐色のシルト質粘土を含む。	
V 2.5 7/2	灰黄色	粘土	2.5Y R 5/6明赤褐色のシルト質粘土を複数に含む。	

第4図 D区ND・NE-536地点断面図

V. 発見された遺構と遺物



第5図 B区検出遺構

1. B区

発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、土壤5基、焼土遺構9基である。全ての遺構は、頂部と南側斜面から発見されており、住居跡は南側斜面、土壤は頂部から発見されている。焼土遺構は点在する。このうち第1号住居跡は、遺構内に焼土・炭化物が広く確認されており、火災焼失住居の可能性が考えられる。第2・第3号住居跡では、確認面で灰白火山灰の堆積を確認できる。焼土遺構の形状は円形6基、長方形3基に分けられる。

遺物は住居跡とその周辺で土師器・須恵器が出土しており、特に土師器が多い。また、他の地区では散布が確認されている縄文土器は、ここでは発見されていない。

○検出した遺構

(1) SK-1 (確認地点 MM・MN-487・8)

平面形はやや歪んだ長方形で、長軸311cm、短軸233cm、深さ15cmの規模である。底面の一画に径65cm、深さ11cmの規模の落ち込みがあるが、他はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

(2) 第6号焼土遺構 (確認地点 ND・NE-473・4)

平面形は長方形で、長軸192cm、短軸73cm、深さ14cmの規模である。底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。西側の壁面が暗赤色に焼けている。

(3)第7号焼土遺構（確認地点 N E -460）

平面形はやや歪んだ円形で、径95cm、深さ10cmの規模である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。北側の壁面の一部がにぶい赤褐色に焼けている。

2. C区

昨年度の調査区の北側及び南側（以下「北区」、「南区」）を拡張して調査を行った。

(1)北区

発見された遺構は、竪穴住居跡7軒、土壙15基、焼土遺構11基である。住居跡は標高30m前後の平坦地から確認されており、そのすぐ北側には土取りによる崖がある。北区の南端を流れる沢の近くでは、径10~20cmほどの礫を多く含んだ土壙がみられる。焼土遺構は地区西侧に点在し、多くは円形で径1mほどの規模である。

遺物は底部ヘラ切りの土師器・須恵器が大半を占め、住居跡とその周辺に出土している。他に石器・縄文土器片・中世陶器片が各1点ずつ出土している。

(2)南区

土師器・須恵器の破片の散布は認められるものの、遺構は発見されなかつた。

3. D区

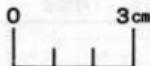
発見された遺構は、竪穴住居跡4軒、窯跡7基、焼土遺構20基、合口甕棺1基、溝1条である。このうち旧沢跡を境にして、北側には第3号窯跡を中心とした遺構のまとまりがみられ、4軒の住居跡は全てこの中に含まれる。他の遺構は点在している。灰原の確認されている窯跡は第1・第3・第4号の3基であり、中でも第3号窯跡の灰原は規模が大きく、170m²は超えるものと思われる。また、第2・第7号窯跡は、他の5基とは形状及び出土遺物に差異がみられる。焼土遺構の形状は、円形14基、長方形4基、溝状2基に分けられる。合口甕棺は土師器製（ロクロ使用）で長胴形を呈し、高崎（石川他：1987）よりも一回り小さい。

遺物は窯跡とその周辺で多量の須恵器を出土している。殊に第3号窯跡とその周辺では顯著であり、回転糸切りの坏が多い。土師器の出土は少ないが、その中で第2号住居跡、第2号窯跡とその近くでは比較的多く出土している。他に石器15点、縄文中期の土器片1点、古銭1枚が出土している。石器は狩猟用の道具が多く、大半が480~530ラインにかけての東側斜面で出土している。古銭は寛永通寶（古寛永、初鋳年1637年）である。

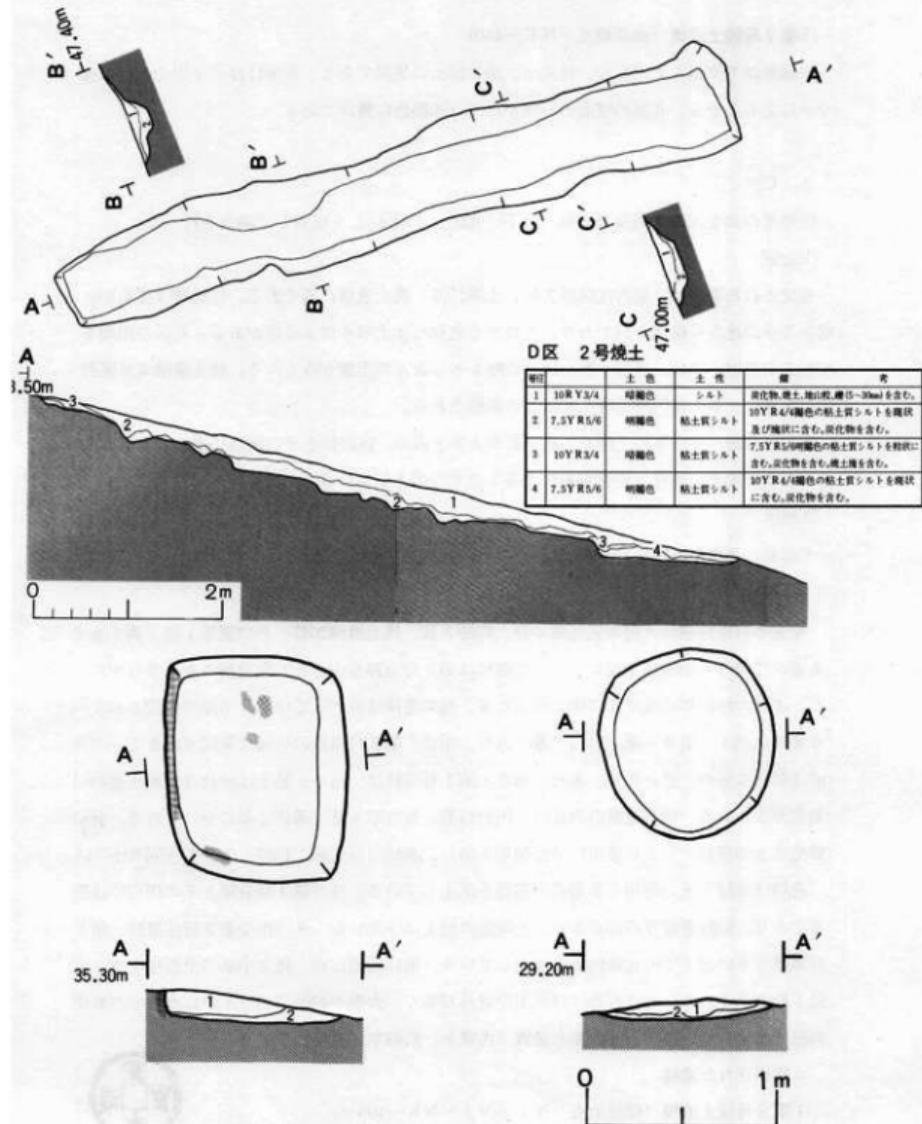
○検出された遺構

(1)第2号焼土遺構（確認地点 N I・N J・N K-495-6）

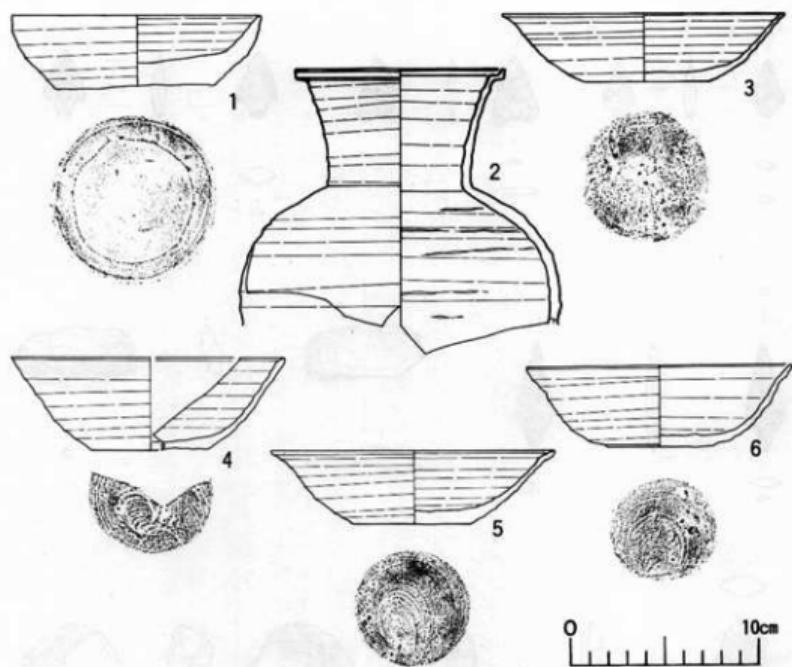
平面形は溝状で、長軸744cm、短軸104cm、深さ35cmの規模である。1~4層に炭化物、3層に焼土塊を含んでいるが焼け面はなく、これらのものは流れ込みによるものと思われる。



第6図 D区 古銭拓影



第7図 D区検出構造



土器観察表

種類・器形	出土地点	外径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	内面	底面
須恵器・蓋付鉢	C区・S-1-8 確認面	13.3	8.4	3.8	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ 底面:回転ヘラ切り	
須恵器・壺	D区・1号窯底壁縁面	11.2	—	—	外面:ロクロナデ 内面:ロクロ痕	底面:—
須恵器・壺	D区・3号窯 確認面	13.0	6.9	3.6	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	底面:回転舟切り
須恵器・壺	D区・3号窯 確認面	15.2	6.5	4.9	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	底面:回転舟切り
須恵器・壺	D区・3号窯 確認面	15.1	6.8	3.9	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	底面:回転舟切り
須恵器・壺	D区・5号窯 確認面	14.1	5.5	4.3	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	底面:回転舟切り

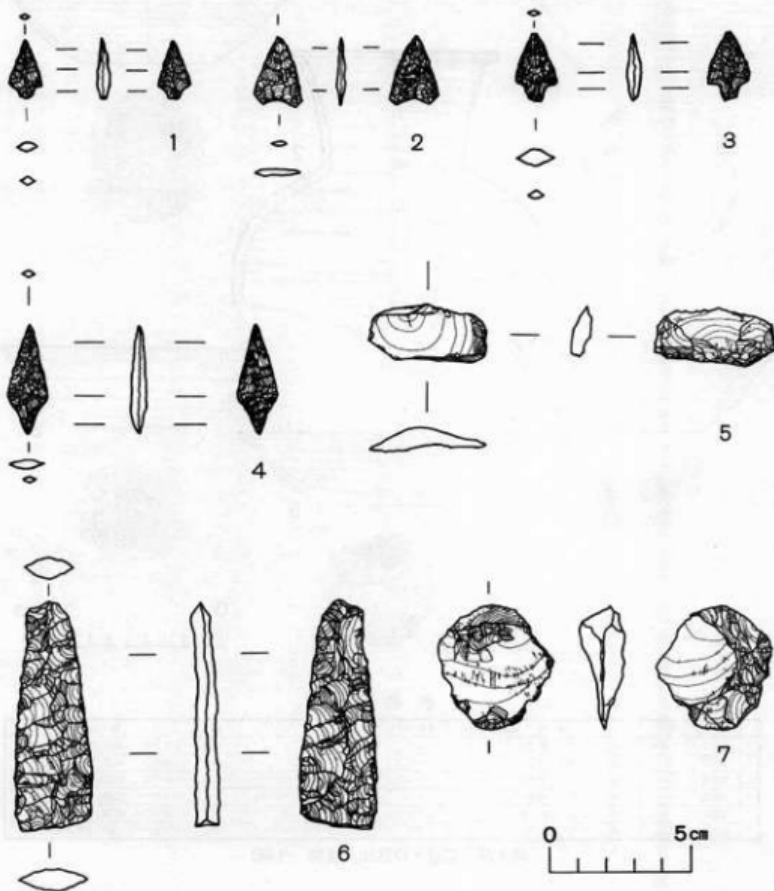
第8図 C区・D区出土遺物(土器)

(2) 第3号焼土遺構(確認地点 NA-525-6)

平面形は長方形で、長軸119cm、短軸95cm、深さ18cmの規模である。底面はほぼ平坦で、西側の壁面を除いて壁は緩やかに立ち上がる。西側の壁面及び底面の一部が赤褐色に焼けている。堆積土は2層に分けられ、1層からは須恵器片が出土している。

(3) 第6号焼土遺構(確認地点 NA-556)

平面形は円形で、径95cm、深さ8cmの規模である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。第2号焼土遺構同様に明確な焼け面はみられない。堆積土は2層に分けられ、1層からは須恵器片が出土している。



石器観察表

	形 様	出 土 地 点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重 量 (g)
1	石 鏽	D区・N-S-528	24	16	3	0.9
2	石 鏽	C区・P-D-550	20.5	12	4	0.6
3	石 鏽	D区・N-O-478	24	15	5	1.3
4	石 鏽	D区・N-P-509	39	14	5	1.6
5	スケレインバー	D区・N-P-511	20	42	7	7.6
6	石 鏽	D区・N-M-526	41	28	8	20.6
7	スケレインバー	D区・東 領	44	40	16	16.6

第9図 C区・D区出土遺物(石器)

VII. まとめ

今回の調査で確認されたことを要約すると次のようになる。

- (1)B区……遺構は頂部と南側斜面から発見されている。遺物は住居跡とその周辺で土師器・須恵器が出土している。
- (2)C区……北区と南区の2ヶ所を調査した結果、遺構は北区で発見され、遺構の種類ごとに分布地点の違いがみられた。遺物は住居跡とその周辺で土師器・須恵器が出土している。昨年度と併せると、北区及びその南側に続く緩斜面に遺構がまとまることが判った。
- (3)D区……遺構の多くは北側で発見されている。また、本年度はD区のみで窯跡が発見されている。多くの場合、窯跡は並んで発見されるものであるが、ここでは最も近接した窯でも10m以上離れており、D区を南北に区分する沢に沿って点在する傾向にある。遺物は住居跡・窯跡とその周辺から出土している。

昨年度同様、今回の調査も発掘面積に比べて発見された遺構は少ない。窯跡は昨年の1基を含めて8基となった。このうち第1・第6号窯跡がかろうじて並んでいると言える程度で、多くは点在する傾向にある。また、C区（南区）の南東500mにある閑ノ入子供広場の一画や須江山浄水場の南側にも窯跡が1基ずつ確認されているが（石巻高等学校教諭三宅宗謙氏の御教示による）、現段階ではその並びの同一標高地点に窯跡は発見されていない。来年度以降の調査で資料を補充し、窯跡が点在する傾向にあるのが本地区の特徴であるのか否かを今後の課題として探ってゆきたい。

引用・参考文献（五十音順）

- 石川・相沢・石本（1987）：「高崎遺跡」多賀城市文化財調査報告書第12集
- 伊東信雄（1957）：「古代史」宮城県史第1巻
- 恵美・菅井（1987）：「愛島東部丘陵遺跡群詳細分布調査Ⅲ」名取市文化財調査報告書
第18集
- 小山・竹原（1987）：「新版標準土色帖」
- 笠原・茂木（1985）：「石兜遺跡」宮城県文化財調査報告書第106集
- 河南町文化財保護委員会（1986）：「わがまち河南の文化財」
- 工藤・菅原（1987）：「柳生」仙台市文化財調査報告書第95集
- 高橋・阿部（1987）：「須江糠塚遺跡」河南町文化財調査報告書第1集
- 田中・主浜・佐藤（1984）：「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集
- 中野（1988）：「須江関ノ入遺跡詳細分布調査」河南町文化財調査報告書第2集
- 日本貨幣商協同組合（1984）：「日本貨幣型録84年版」
- 松本彦七郎（1919-a）：「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小発掘成績」人類学雑誌34の5
(1919-b)：「宝ヶ峯遺跡について」考古学雑誌第9巻第9号
- 宮城県教育委員会（1988）：「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第125集
- 三宅・進藤・茂木（1987）：「赤井遺跡」矢本町文化財調査報告書第1集

写 真 図 版

①B区
調査前全景

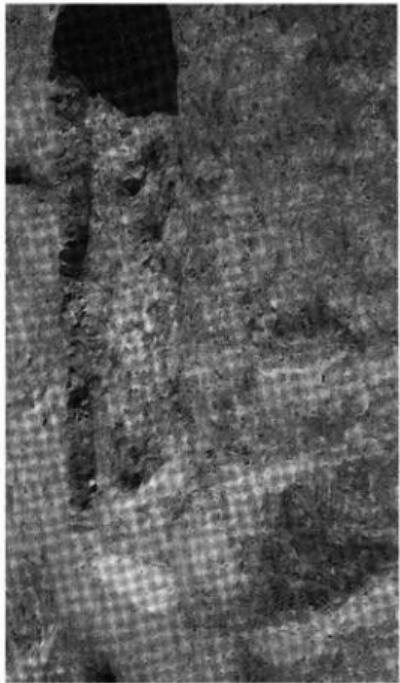


②C区
調査前全景

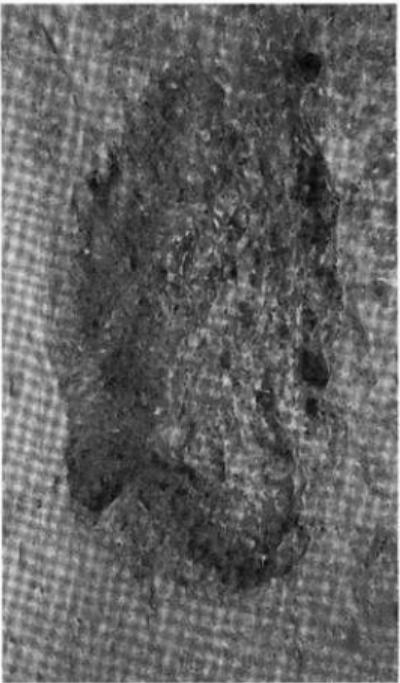


③D区 3号窓跡
・灰原確認面

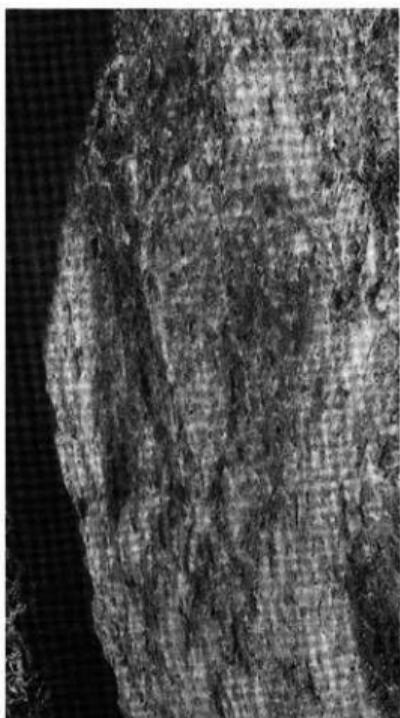




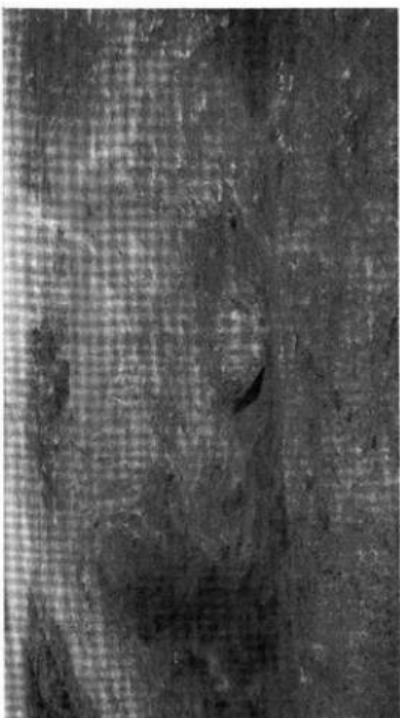
⑥ B区 6号烧土遗物情况



⑦ B区 7号烧土遗物情况



④ B区 1号住居窑情况



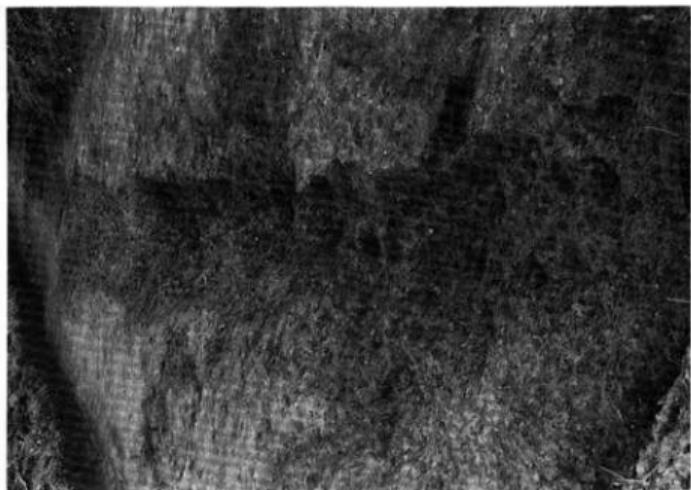
⑤ B区 SK-1烧土情况



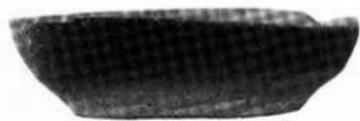
⑨ D区 3号烧土遗構
検出状況



⑩ D区 6号焼土遺構
検出状況



⑪ D区 2号焼土遺構検出状況



1



2



3



4

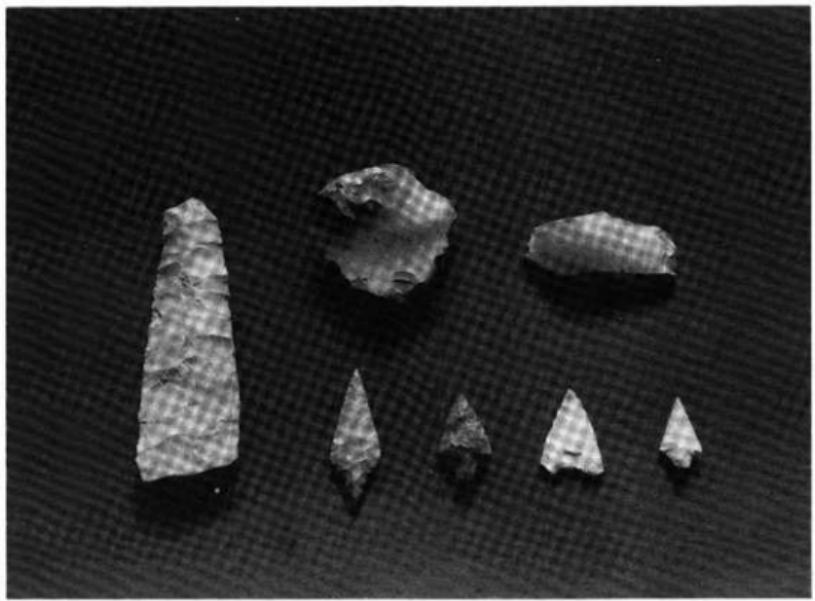


5



6

⑪ C区・D区出土遺物（土器）



⑫C区・D区出土遺物（石器）

職 員 錄

社会教育課

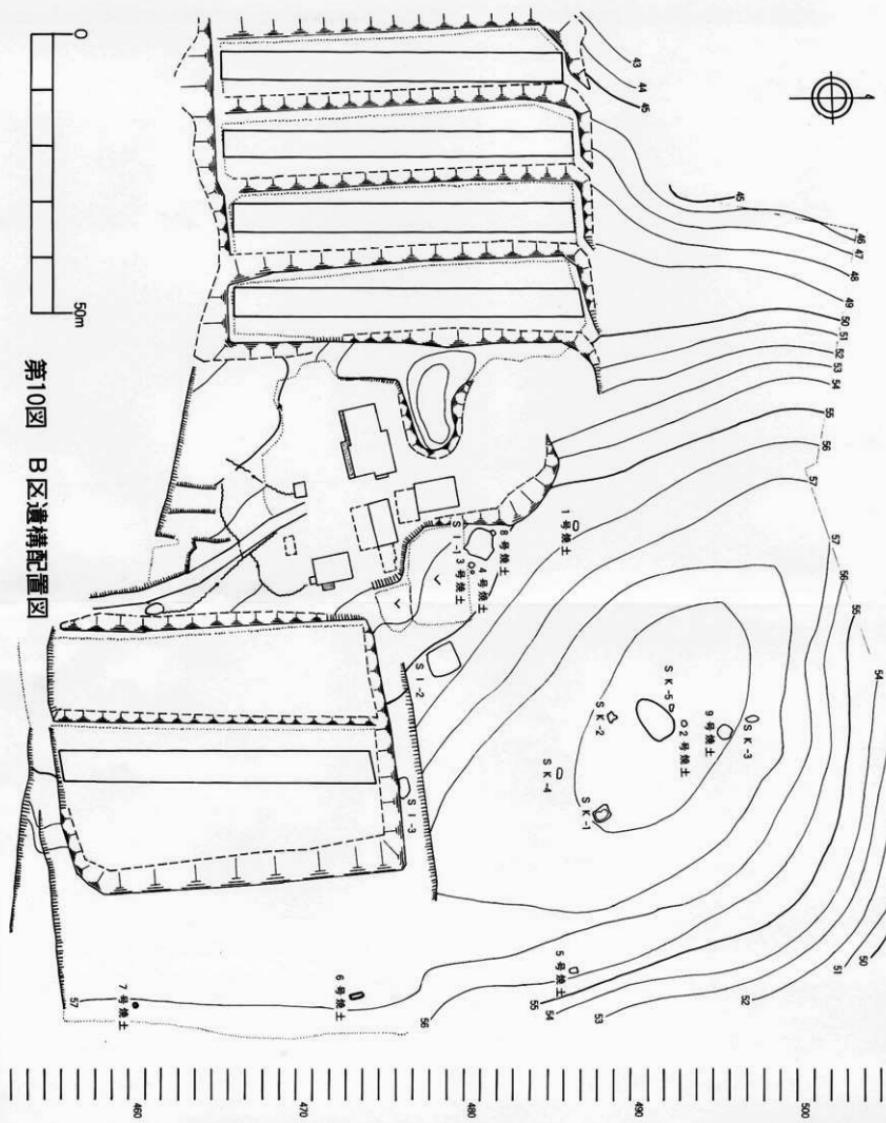
課長 高松 律
課長補佐 浅野 千代子
係長 阿部 光男
主事 中野 裕平
社会教育指導員 斎藤 宏子

河南町文化財調査報告書刊行目録

第1集 須江糠塚遺跡（昭和62年3月）

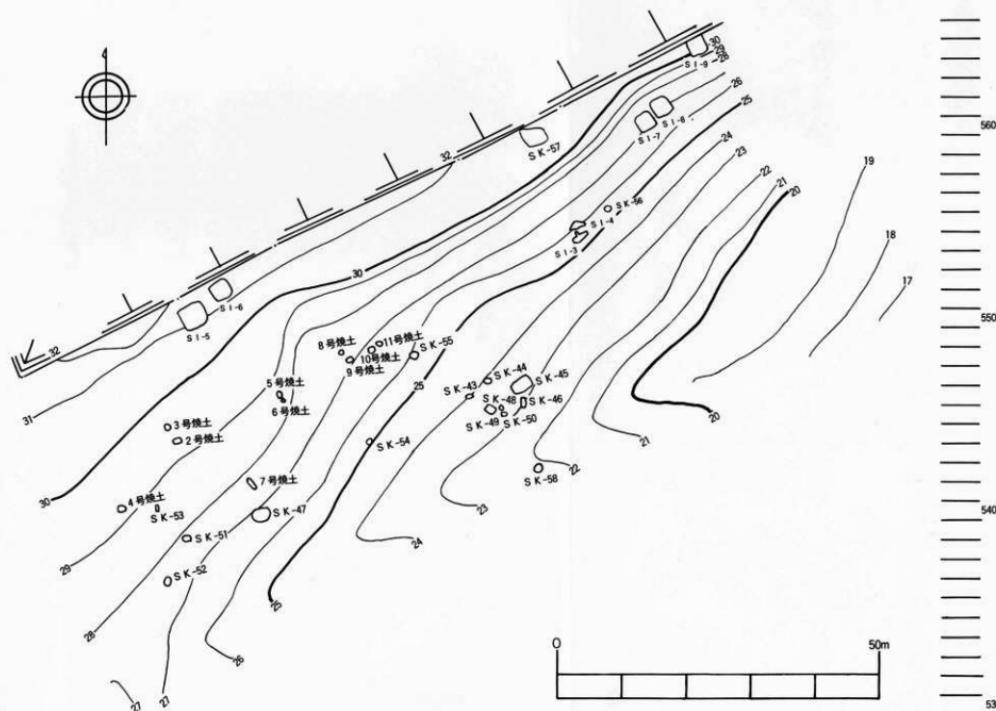
第2集 須江閣ノ入遺跡詳細分布調査（昭和63年3月）

K
F
G
K
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
Z



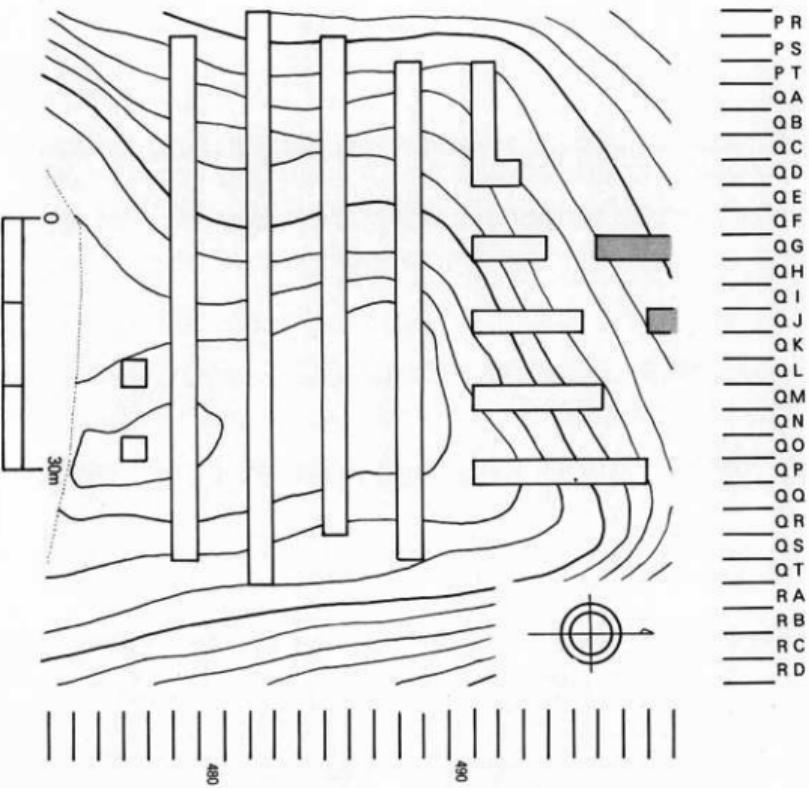
第10図 B区遺構配置図

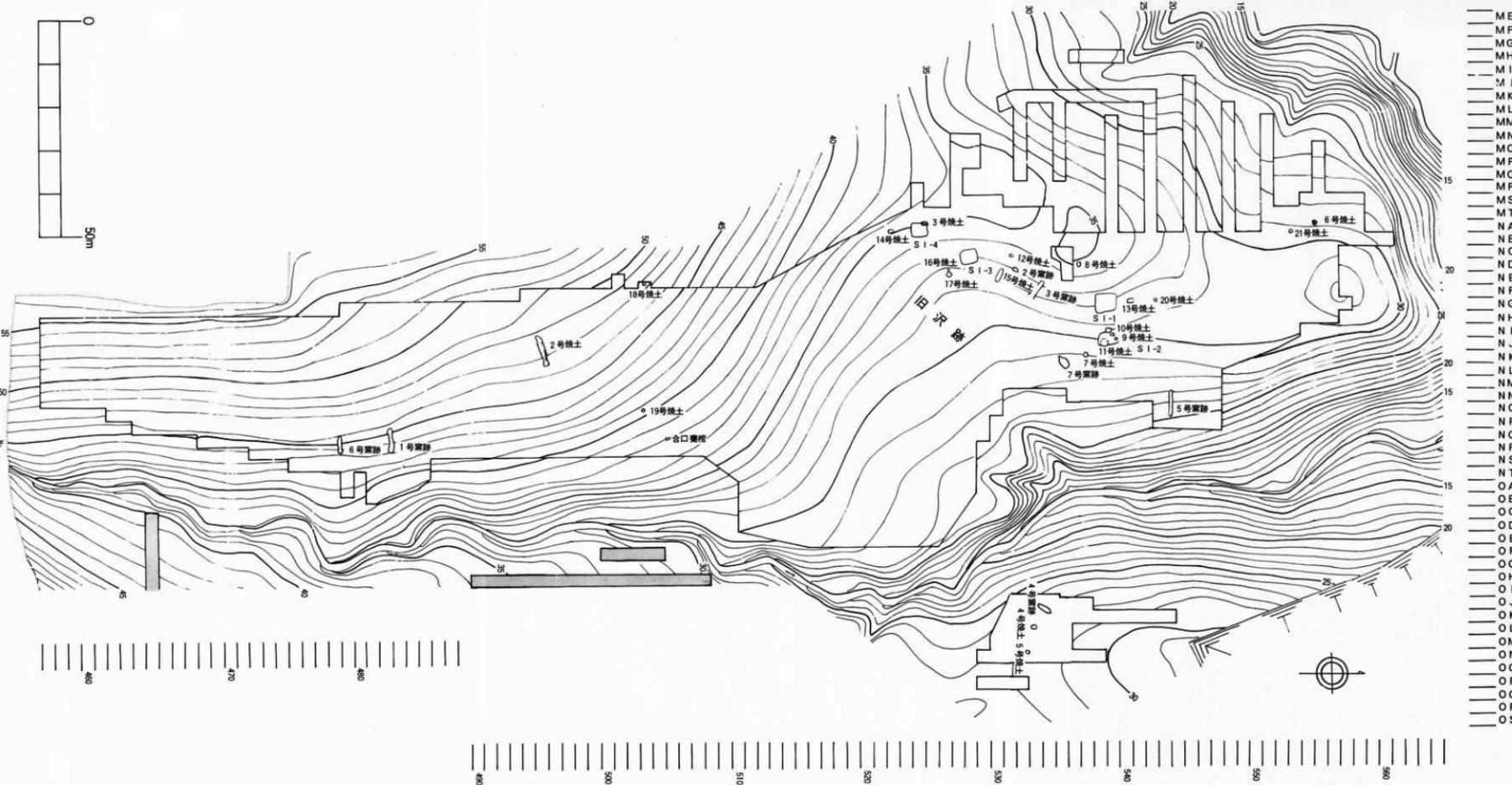
OM
ON
OO
OP
OR
OS
OT
PA
PB
PC
PD
PE
PF
PG
PH
P-I
PJ
PK
PL
PM
PN
PO
PP
PQ
PR
PS
PT
OA
QB
QC
OD
OE
QB
AG
H
I
J
K
X
AL
AM
AN
AO
PO
OR
S



第11図 C区(北区)構造配置図

第12図 C区(南区)トレンチ図





第13図 D区遺構配置図

河南町文化財調査報告書第3集

須江関ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ

平成元年3月31日発行

発行 河南町教育委員会

宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7

印刷千葉印刷所

